広報はやま12月号

待望の「堀口大學文庫」が開設

没後二五年を記念し、図書館内に詩集や翻訳本、書簡、自筆原稿など貴重な資料約四〇〇点を展示

葉山をこよなく愛した詩人で、翻訳家の堀口大學。名誉町民でもある氏の没後二五年を記念して、図書館内に「堀口大學文庫」が、先月一日にオープンしました。同文庫には、代表作の訳詩集『月下の一群』をはじめ、詩や著作、自筆原稿、書簡などが多数展示してあります。

堀口大學文庫は、図書館の二階に新設されました。広さは五〇平方メートルほどで、入口の上部には、自筆の看板が掲げられています。

室内に入ると、大學先生の写真と、その横には大きな年表が掲示され、八九年の輝かしい業績が、一目で分かります。

また、書棚や展示台などはすべて濃い茶色で統一され、しっとりと落ち着いた雰囲気が漂います。

堀口大學先生は詩人として活躍する一方、二〇世紀のフランス文学を精力的に翻訳して日本に紹介し、昭和の詩と文学に大きな影響を与えました。

その仕事は多彩で、遺した著作類も膨大なものですが、堀口大學文庫には、図書館が約十年の歳月をかけて収集した貴重な資料約四〇〇点を展示しています。

主な展示品を紹介すると、まずジャンコクトーやポール・ヴァレリーなど

▲堀口すみれ子さんと町長

フランスの気鋭の詩人たちの作品を翻訳して、一冊にまとめた代表作の訳詩集『月下の一群』や処女詩集『月光とピエロ』などが目に付きます。

また、多数の翻訳本や堀口大學詩集・全集をはじめ、編集に携わった雑誌、作家の中河与一に宛てた書簡、親友の佐藤春夫や安岡章太郎ら文壇仲間と一緒の写真、あちこち削除や書き込みのある自筆原稿なども展示されています。

このほか、金箔模様入りの革製の翻訳本や表紙に紫水晶をはめ込んだ訳詩集といった珍しい本や、三島由紀夫が「正に少年時代の私の聖書であった」と評を寄せているレイモン・ラディゲ著『ドルヂェル伯の舞踏会』の翻訳書など貴重な本もあります。

さらに、室内の一角にはテレビが置かれ、「大學と葉山」のタイトルで、DVD映像が常時、流れています。葉山時代の大學のプロフィールを、関係者の証言などを交えて紹介するこのビデオ・DVD（約二五分）については、希望者への貸し出しも行っています。

【堀口大學と葉山】

堀口大學先生は、明治二五年（一八九二）に東京・本郷で生まれました。名前の「大學」は、父が大学生（東京大学法科）であり、家が赤門の前にあったことから「大學」と命名されました。

その後、父方の郷里の新潟県・長岡で少年時代を過ごしましたが、上京して慶応大学に入学。しかし、すぐに大学をやめ、十九歳から三三歳までの十数年間、外交官の父に付いて中米や西欧各国を転々としました。

当初は父と同じ外交官を志しましたが、体が弱かったために文学に専念。大正七年に最初の訳詩集『昨日の花』を、さらに翌年には処女詩集『月光とピエロ』、歌集『パンの笛』を出版して、文壇にデビューしました。

以後、在欧中にふれたフランスの近代詩に傾倒し、コクトーやヴァレリーなどの詩を次々と翻訳しました。大正十四年に、それらをまとめた訳詩集『月下の一群』を刊行して一躍、脚光を浴びました。その後も詩や小説、評論など幅広い分野で、フランスの新しい文学の紹介に努めるかたわら、自らも詩作に励み、『水の面に書きて』『新しき小徑』『砂の枕』などの詩集を相次いで世に出しました。

そして、戦後間もない昭和二五年六月、五八歳の時に葉山へ転居、海と山に囲まれ、温暖なこの地をこよなく愛し、文学活動に励みました。

その一方で、葉山の町歌や葉山小学校の校歌を作詞するなど、町とも深いかかわりを持ち、これにより昭和五〇年には名誉町民に選ばれています。その後、五四年には文化勲章を受章しましたが、二年後の五六年三月十五日、静かに八九歳の生涯を閉じました。

森戸神社の境内には「花はいろ　人はこころ」の詩碑が立っています。

［利用法］

堀口大學文庫は、図書館の開館時間内であれば、自由にご覧いただけます。

問合せ　図書館　☎八七五－〇〇八八